

民俗建築アーカイブ

Minzoku Kenchiku Archives

昭和9年の修理以前の正福寺地蔵堂の写真

日本民俗建築学会アーカイブ担当

The photos of Syohukuzi Zizodo temple before repair in 1934

Editorial Committee

1 『民俗建築』が扱うテーマの変遷

曾て日本民俗建築学会の取り扱う対象は、まず、民家とは何か？ から始まって、その答えは“民家とは住生活と生業が同じ建物内で営まれる家屋で、主に農家建築を言う”というようなものであった。当然のことながらかつての庶民の住まいは職業によって商家・漁家・下級武士の住宅などに分類してもよいのであろうが、たとえば当学会は当初、武家の住まいは武家住宅と呼んで、民家とは一線を画していた。武家は今のサラリーマンのように禄（給料）で生活するから家内では生産行為を行わないということからであろう。実際は下級武士の住居は農民と同じような住まい方であったし、上の定義に当てはまる民家そのものであった。したがって武家住宅も民俗建築の対象として見学も研究もされてきた。また商家

や漁家は“民俗建築”の研究範囲に入っていたから、本学会が茅葺屋根の農家の住まいに強くこだわる意識の一方で、実際は割合曖昧な、大らかな感覚でこの学会が発展してきたことが分かる。今はその大らかな花が開いて馥郁とした香りを漂わせているようにさえ思われる。これこそが学際的研究者の集まり、すなわち建築・民俗・歴史・言語・生活・環境などなど、多様な研究者が咲かせ得るこの学会特有の花であろう。今、学会誌を見ると、いわゆる民家のほかに、社寺建築の論文もあれば、外国の民家園の紹介もあり、カッパドキアから沖縄のRC造住宅、外国の民家町並みなど建築分野の広がりはもちろんのこと、言語・方言・宗教・行政・経済など多種多様なテーマが掲載されている。ただ、それには人々の生活と歴史が根本に存在していることは確かである。

さて、民家とは何かと議論していた1970年代、鉄道の施設をテーマに発表を希望した故網谷りょういち氏は、“鉄道施設は民家ではない”と却下されたという話が逸話として残っている。明治・大正・昭和の鉄道施設には、今では近代化遺産として保存の対象となり、研究テーマの一つになっているが、昭和50年代は当学会では認知されないテーマであった。網谷氏の研究は当学会にとっては10数年早かったと言えるのである。その後、“戦争遺跡”として砲台跡の研究を発表した故

高橋秀夫氏の頃は、研究の対象範囲も広げられて、高橋氏の発表は『民俗建築』に活字となって残ることができた。その頃から民俗建築学会で取り上げられる研究テーマは、“どこまで許されるのか”と、問題提起を意識した発表が相次いだ。そのような模索を経て今は環境・保存・再生・災害・復興など、広い視野で民俗建築を考える現在の姿に成長したと思うのである。

2 このお堂は何でしょうか

さて、今回より趣向を変えて昭和初期の社寺・宮殿にかかわる話題を少し取り上げてみたい。

佐藤重夫氏は昭和8年に奈良・京都の社寺を時間をかけて廻っている。東大の4年生のときである。そのときの写真が相当数残されていて、モノクロの画質は少し劣化しているが、今となっては貴重なものも少なくはない。その中には建物の姿かたちがすっかり変わってしまったものや滅失してしまったものもある。また、中には場所や名称の不明な田園風景や町並みがあって、佐藤氏が学生の頃カメラを持ってこんな所にも行ったのかと興味がそそられる。

佐藤氏は写真を厚紙の台紙に貼って保管している。台紙には被写体の名称や撮影年月日などが几帳面に記されていて、同じ分類のものは通し番号が振られているが、中には無記入のものも混じっている。そんな写真を判定するのは極めて困

難であるが、謎解きに似た面白さもある。写真の中には社寺建築のものが数百枚あるが、そのほとんどは被写体と撮影年月日が記されており、しかも昭和初期のモノクロ写真が多く希少価値が極めて高いものである。それらの中で名称不明の写真が数十枚あるが、その中で特に筆者が長い間気になっていたものがあった。2枚の台紙に写真が2枚ずつ貼っているが、これらは同じ建物であることは分かる。写真1~4がそれである。裳階付き茅葺屋根のお堂で、屋根も波蓮子欄間(弓欄間)も扉も相当傷んでいるが、造りや形が端正な唐様の堂宇で、何か由緒ある建物に違いない。形から見て地藏堂か開山堂、経堂といったものであろうが、なぜか見たことのある形に思える。しかし、調べたが見当がつかない。この写真が入っていた箱には昭和8年に撮影した奈良の社寺の写真が多く、その中に混じっていたから、おそらく奈良にあるお寺であろうと想像した。このお寺は今は滅失して存在しないのかも知れないし、あるいは残っているにしても形が大きく変わっていることもあり得る。古い写真を解明するのは困難であるが、社寺の場合は各部の形が遺伝子のように残されているから、それをヒントにした謎解きの面白さもあり、道楽の領域でもある。ただこの写真は難解であった。一人で解決できず、この謎解きを博学な宮崎勝弘氏に振り向けたところ宮崎氏は私の道楽を真面目に受

け止めてくださり、これほどの建物なら文化財として残っているのではないかと目星をつけ、文化財に詳しい工学院大学教授の後藤治氏に写真を送って問い合わせさせてくれた。この道の専門家は解決のための目の付けどころが違うのと、それを可能にする人脈を豊富に持っている。後藤氏はさらに文化庁の文化財調査官武内正和氏に問い合わせさせてくれたのである。その結果武内氏の判定は「正福寺地蔵堂」ではないかという回答が返ってきた。しかもこの写真は昭和9年の修理前の写真と思われると言って、『修理報告書』に載っている修理前の写真まで添付して下さった。宮崎氏を経由してこの回答を戴いて、さっそく佐藤重夫氏の写真と照合したところ、武内氏から戴いた修理報告書の写真(5~10)と完全に一致したのである。

奈良の寺院とばかり想像していた写真が、意外にも東京都心からすぐ近くにある正福寺地蔵堂であったことに驚いた。正福寺といわれれば確かにそうで、奈良の寺院という先入観が正しい解明を狂わせてしまっていた。

正福寺とは東京都東村山市野口町4丁目にある禅宗のお寺で、本堂の前にある「千体地蔵堂」といわれる堂宇がこの写真の建物である。鎌倉の円覚寺舍利殿とほぼ同一の規模と様式を持つ禅宗様建築の代表的遺構である。昭和3年(1928)に特別保護建造物指定(古社寺保存法)

を受け昭和4年(1929)に国宝指定(国宝保存法)を受けている。佐藤氏がここを訪れた昭和8年は北多摩郡東村山村といわれていた頃で、周りには人家もまばらであった。その中に立つ破れ堂宇の姿を見て、これが「国の宝」の指定を受けた名建築なのかと嘆き悲しんだに違いない。しかし今は修理されて円覚寺舍利殿と酷似の建築として知られている。筆者は早速カメラを持って確認に出かけた。お堂の内部には入れなかったが外観は細部まで見ることができ、写真も撮ることができた(写真11~16)。まさに禅宗様の手法で鎌倉の円覚寺舍利殿(写真17、室町前期、国宝)と瓜二つであるが、円覚寺舍利殿は見学禁止の領域奥深くにあって望見も出来ないのに対して、ここは自由に見学できたことはありがたいことである。このお堂の前に立つ案内板を読むと、昭和8~9年に屋根の茅葺きを柿^{こはら}葺きに改修したと記されているから、佐藤氏は修理の直前に訪れたのであろう。改修のとき発見された墨書銘によって室町時代の応永14年(1407)に建立されたことが分かったという。これよりも前の昭和4年に国宝の指定を受けているのであるから、建立年が不明のまま国宝の指定を受けたのであろうか。ともあれ、佐藤氏は修理や建立年のことを知ってほっと安堵したことであろう。昭和9年の改修後、更に昭和48年にも改修されて、現在に至っている。案内板によると、地蔵堂は都

内唯一の国宝建造物であり、中に祀られている本尊と小地蔵尊像は市指定の文化財になっている。正式には千体地蔵堂といわれるもので、修復後に掲げられたものであろうか中央間の頭貫には右から「国寶千體地蔵尊」と揮毫した扁額が懸っている。

3 修理前と修理後の「地蔵堂」

前述のとおり写真 11～16 は 2014 年 4 月 16 日に撮影した現在の地蔵堂である。これと昭和 8 年の写真を比べると、屋根葺き材は変わったが裳階付きの全容は変わっていない。ただし正面の脇間は火灯窓付き一間と板壁一間の順になっていたが、修復後はその順序が変わって板壁一間と火灯窓の一間に変わっている。しかも板壁は火灯窓の枠を付けて中は棧唐戸風にしている。両端一間は、目板張りの壁であったが、今は目板張りの腰壁の上に火灯窓を開けている。円覚寺舍利殿も同じであるから、これが本来の形であろう。東側面・西側面も壁と窓の位置が変わっていて、修理前は板壁、格子窓、板壁、板壁の順であったが、修復後は板壁、火灯窓枠付き板壁、火灯窓、火灯窓の形に変わった。北側だけは変わらず中央に折り棧唐戸を置き、両側は板壁となっている。弓欄間は修理され、懸魚は正式の蕪懸魚に変わっている。四脚門の山門から入って正面に見る地蔵堂は国宝にふさわしい気品と優美さを備えたものである。

謝辞 本稿の執筆にあたり写真の解明にご協力いただいた本学会理事長宮崎勝弘氏、工学院大学教授後藤治氏、文化庁文化財調査官武内正和氏に大変お世話になりました。ここに記し篤くお礼申し上げます。